

連用修飾に位置する数量詞の日中対照 研究—談話機能の観点から—

洪雅琪

明道大学応用日本語学科 助理教授

要 旨

本研究はテキスト分析による日中及び中日対訳資料を用い、連用修飾に位置する日本語の数量詞使用とそれに対応する中国語の表現について包括的な考察を試みる。両言語において連用修飾に位置する数量詞の使用状況をまとめ、談話機能の観点から日中対照表現に見られる相違の要因を探り出すことを目的とする。

キーワード：日本語：数量詞、連用修飾、主観性、談話機能、テキスト分析

連用修飾に位置する数量詞の日中対照研究—談話機能の観点から—

A Study of the uses of Quantifiers in NCQ-type —From the Viewpoint of Discourse Function—

Ya-Chi HUNG

Assistant Professor of Department of the Applied Japanese, Mingdao University.

Abstract

This paper will take the uses of Quantifiers that focus on NCQ-type in Translation Corpus, and for examining the frequency of quantifiers by using the method of TEXT analysis. Then it is hoped to find out the characteristics and difference of quantifiers in Japanese and Chinese. Also, through the analysis of quantifiers in translation corpus, it intends to help the learner' s understanding of Japanese and Chinese Language.

Keywords : Quantifiers, NCQ-type, Subjectivity, Discourse Function, the method of TEXT Analysis

中日數量詞連用修飾用法(NCQ-type) 之對照研究 —以談話機能的觀點論之一—

洪雅琪

明道大學應用日語學系 助理教授

摘 要

本研究採以TEXT分析法利用中日兩語言對譯資料，針對出現於連用修飾用法(NCQ-type)中的數量詞句型結構作總括性的考察。其旨在分析和量化現今中日數量詞的使用情形，並從談話機能的觀點來比較探究影響中日文語法差異性之重要因素。

關鍵詞：數量詞、連用修飾用法(NCQ-type)、主觀性、談話機能、TEXT分析法

1. 先行研究からみた連用修飾

日本語においては、遊離数量詞文、連体数量詞文、同格数量詞文は基本的に同義であるが¹、擬古文を除くなら、遊離>連体>同格という順で容認度が下がっていく傾向が見られるのに対し、中国語においては一般に連体数量詞>遊離数量詞>同格数量詞という順で容認度が下がっていく（李2006）。このことから、日本語では連用修飾に位置する数量詞の表現形式である「NCQ型²」構文が多用されているが、一方、中国語の場合ではそれに対応する数量詞の使用がそれほど多くないことが分かる。従来の研究はほとんど日本語の「NCQ型」構文を対象としており、それに対応する中国語の数量詞の表現を取り上げて考察したものは極めて少ない。林（2002）が指摘するように、木村（1981）で言及されている「動作の結果としての受け手の静的な状態を表

す“V著”存在文」は、先行詞と分離できる数量詞を許すという点において興味深い。

(1) 院子裡種著3棵柳樹。

〈庭に3本の柳の木が植わっている／植えてある〉

（林2002、p. 98。日訳は山口2005）

(2) 柳樹在院子裡種著3棵。

〈柳の木が庭に3本植わっている／植えてある〉

（林2002、p. 98。但し、前置詞の“在”の付加と日訳は山口2005）

さらに、林（2002）によれば、「“著”が現在進行中の具体的な動作を表すタイプの“V著”存在文は遊離数量詞を許さない」ということが観察される。

(3) 小路上走著五個老人。

〈小道を5人の老人が歩いている〉

（林2002、p. 98。日訳は山口2005）

(4)*老人在小路上走著五個。

*〈老人が小道を5人歩いている〉

（林2002、p. 98。但し、前置詞の“在”の付加と日訳は山口2005）

¹ 李（2006）は、日本語でよく現れている三つの型の数量詞、NQC型、Q/NC型、NCQ型と呼ばれているものについて、それぞれ「同格数量詞」、「連体数量詞」、「遊離数量詞」と名付けている。本稿では、名詞句からの数量詞の移動によって遊離数量詞が派生されるという数量詞遊離説の論述が妥当であるか否かは問わず、便宜上、連用修飾に位置する日本語の数量詞を以下、「NCQ型構文」と呼ぶことにする。

² 奥津（1986、1996）の表記法に従い、Nは名詞、Qは数量詞、Cは格助詞を示す。

しかしながら、筆者の調査³によると、分析対象となる“V著”を検索し、約1,600例文の中から数量詞を伴っているものを手作業により抽出したところ、“V著”において先行詞と分離した数量詞の用例は1例も見られなかった。(1) (3) のような「“V著” + 数量詞 (分離なし)」存在文⁴、または「“V著” + 数量詞 (分離なし)」の非存在文⁵しか現れなかった。このことから、中国語において「NVQ型」構文⁶を容認できる要因はほかにあるのではないと思われる。よって、本稿では

日中対照言語学の立場をとり、日本語の連用修飾に位置する「NCQ型」構文とそれに対応する中国語の表現を考察する。その際、この論議に関連する限り、代表的な研究での問題点を検討しながら、テキスト分析を通して談話機能の観点から探求してみたい。

1.1 奥津敬一郎 (1986)

奥津 (1986) では「子豚が三匹」のような「NCQ型」構文にぴったり対応する中国語の文はないようだと言われているが、次のような例が言及されている。

(5)a. 請拿三個桌上的蘋果。

b. 請把桌上的蘋果拿三個。

(5a) と (5b) を日本語に訳せば、「テーブルの上のりんごを三つとってください。」となり、どちらにおいても、“三個”は不定名詞だと考えられるため、これは一種の数量詞遊離だと指摘している。しかし、奥津 (1986) の指摘はそこでとどまり、“把bǎ”による目的語名詞句が動詞の後ろに生じることについて厳密な分析はなされていない。本稿の立場では、“把bǎ”による「NVQ型」構文は実際の場面でのような機能を果たしているかについても考えてみたい。

³ 筆者は台湾の「中央研究院現代漢語コーパス (Academia Sinica Balanced Corpus of Modern Chinese)」を利用し、約五百万語以上を超えた現代中国語の文献資料 (日常生活や新聞・雑誌・近現代の文学作品など凡そ1万近くの文章を収録) という大規模的なデータベースに基づいて調査を行った。

⁴ 宋 (1992) では、場所主語を取る存在文には動態存在文と静態存在文があり、構造的には同じだと主張されている。

a. 院子裡滾動著一個罐頭盒 (動態存在文)

b. 桌子上放著一本書。 (静態存在文)

⁵ ここでは、上述の宋 (1992) で言及されている場所主語を取る存在文以外の場合を一括して「非存在文」と呼ぶ。

⁶ 本稿では日本語と同様に、中国語でも、名詞句からの数量詞の移動によって遊離数量詞が派生されるという数量詞遊離説の論述が妥当であるか否か問わないが、便宜上、従来の典型的語順 “QNV型構文” や “VQN型構文” と違い、数量詞が動詞の後ろに生じる中国語の数量詞を以下、“NVQ型構文” と呼ぶことにする。

1.2 林璋 (2002)

中国語には①個体量詞、②集合量詞、③度量詞、④不定量詞、⑤臨時量詞、⑥準量詞と⑦動量詞の7種類があり、動量詞はさらに「専用の動量詞」、「名詞を借用する」、「動詞を繰り返す」の三つに下位分類できる。

⁷林 (2002) はその各種の数量詞はいずれも例外なく目的語と分離することができる⁸と指摘している。

また、林 (2002) は「完了」を含意するか否かという観点から観察するにあたり、結果継続と動作維持の文においては数量詞分離が可能であるが、動作継続の文においては数量詞分離ができず、このことから、前者は完了を含意するのに対し、後者は完了を含意しないのだと説明している。

(6)a. *菸他在抽3支。〈煙草は彼は3本吸っている〉

(動作継続)

b. 水果他拎著2袋。〈果物は彼は2袋持っている〉

(動作維持) 【完了】

c. 毛衣他穿著2件。〈セーターは彼は2枚着ている〉

(結果継続) 【完了】

d. *毛衣他慢慢地穿著2件。〈セーターは彼はゆっくり2枚着ている〉

(動作継続)

(林2002、日訳は筆者)

前述したように、林 (2002) の研究で指摘される“V 著”存在文は、実際のデータによると中国語の数量詞「NVQ型」構文の容認性に直接関係していないことが明らかになり、談話機能の見地から考えれば、むしろ他の要因を求めるしかないように思われる。そのため、中国語の「NVQ型」構文については更なる考察が必要だと考えられる。

1.3 山口直人 (2005)

山口 (2005) は中国語の数量詞句に焦点を当て、日本語と同様にMiyagawa (1989) の分析が基本的に有効に働くことを主張している。彼は先行詞と分離できる数量詞の出自について、日本語でも中国語でも数量詞が「遊離」した位置に初めから基底生成 (base generation) されると考えている。日本語においては「数量詞の遊離はガ格、ヲ格で一般に可能で、ニ格は微妙、他の格は一般に遊離が許されない⁹」とされるように、「NCQ型」構文における数量詞が文中の様々な位置に生起

⁷ 朱 (1982) を参照されたい。

⁸ このことについて、林 (2002:94-95) では数量詞が遊離したのではなく、目的語が動詞の前に移動したと見るべきだという。そのため、数量詞が「遊離」したとはせず、数量詞が「分離」したとされている。

するのに対し、中国語においては先行詞と分離できる数量詞が基本的に動詞の補語位置にしか生起しないと述べている。

- (7) a. 他焼了三本書。〈彼は3冊の本を燃やした〉【遊離なし】
b. 他焼書焼了三本。〈彼は本を（燃やすにあたって）3冊燃やした〉
c. 他把書焼了三本。〈彼は本を3冊燃やした〉
d. 他書焼了三本。〈彼は本は／を3冊燃やした〉
(山口2005, p. 120)

さらに山口（2006）では、沈（1995）が指摘する、認知的な概念である“有界”“無界”とMiyagawa（1989）による文の階層構造に基づく「非対格性の仮説」が、二つの異なる“V著”存在文¹⁰における数量詞と先行詞の分離現象に関して同じく一般性の高い説明を行うことに注目し、両者が共にその理論的枠組みの根底に「主語と目的語の非対称性」という共通点を持っていることを指摘している。

しかしながら、山口自身も述べているように、Miyagawa（1989）の非対格

性の仮説においてはこれまで機能的構文論の観点から出された疑問の多くは中国語にも当てはまることから、(7)において「NVQ型」構文に位置する数量詞と見なされる(7b) (7d)の例は文法的に適格だとしても、ややぎごちないように聞こえる。後節で述べるように、実際のデータによれば中国語の数量詞が現れる「NVQ型」構文は、数量詞を強調する機能を果たしていると考えられる。

以上のことから、日本語の「NCQ型」の数量詞構文に関してこれまでの多くの研究がなされてきたが、中国語に関してはまだ十分とは言い難い。本稿では談話機能という立場から、日本語では連用修飾に位置する数量詞¹¹とそれに対応する中国語の表現について分析を試みる。さらに、日本語「NCQ型」に対応する中国語「NVQ型」構文がどのような場合に生じるのか、そこにはどのような条件が付けられているのか、そして中国語の「NVQ型」構文を容認する場合の談話機能を明らかにしたい。

⁹ 加藤（1997a:91）による。

¹⁰ 前述した宋（1992）を参照されたい。

¹¹ 日本語の連用修飾に位置する数量詞については、大木（1987）、加藤（1997a）、高見（1998）なども参照されたい。

2. 資料の収集について

2.1 研究対象の「NCO型」構文

本稿では連用修飾に位置する数量詞の表現形式である「NCQ型（名詞＋格助詞＋数量詞）」を基本にして、それと対応する中国語の表現を取り上げて対照させながら考察する。前述の大木（1987）が説明するように、談話機能における重要な概念としてテーマとレーマがある。つまり情報量の最も低い要素がテーマであり、最も高い要素がレーマであるとされている¹²。「NCQ型」の数量詞の場合から考えれば、次のようになる。

(8) a. 5人の小学生が やってきた。

(テーマ) (レーマ)

b. 小学生が 5人やってきた。

(テーマ) (レーマ)

(大木1987、p. 38)

そして大木の指摘によれば、数量詞が名詞句と分離できるのは、「遊離数量詞と関係づけられる名詞句のみをテーマにし、数量詞を脱テーマ化したい場合、あるいはもっと積極的にレーマにしたい場合である」(p. 37)と述べられ、レーマに位置されることによ

り、よりフォーカスになりやすくなる
ことが分かる。要するに、日本語「NCQ
型」構文が用いられる際、話題を表す
名詞句の数量を強調、明確にする機能
を持ち、よりフォーカス度が高くなる
ことが明らかになった。しかし、それ
に対応する中国語の数量詞表現に関し
て、談話機能の観点からどのような現
象が観察されるか、についての研究は
ほとんどなされていない。よって、次
節では実際に使われた日本語の「NCQ
型」構文に対応する中国語の表現がど
のような役割を果たしているのかにつ
いて考察していく。

2.2 使用資料

研究方法としては、両言語とも文字化された資料を用いる。日中両言語における数量詞の基本的な用法を解明するため、日本の民話、現代小説で中国語への翻訳が出ているもの（計三十五冊）から「NCQ型」構文の用例を取り出して分析した¹³。なお、補足的に台湾の「中央研究院現代漢語コーパス」を利用して、“把”構文を検索し、約

¹² Fukuchi (1978) も参照されたい。

13 より詳しい記述を求めるため、中国語から日本語への対訳資料を利用し、台湾の光華雑誌コーパス（10年間に研究範囲とする）から中日対訳資料のデータを収集し分析を行ったが、今回は紙面上の都合により省くことにし、次の機会に譲りたいと思う。

5,000例文の中から「NVQ型」構文の表現を伴っているものを手作業により抽出した。これらの資料を利用し、連用修飾に位置する数量詞の表現形式である「NCQ型」（名詞＋格助詞＋数量詞）をめぐって、日中両言語における数量詞の使用について談話機能の観点から考察し、その相違を明らかにする。

3 日本語「NCQ型」に対応する中国語の「NVQ型」構文の意味用法

今回、文字化された日中対訳資料から抽出した「NCQ型」の用例を先行詞の文法機能によって分類すると、次のようになる。

自動詞の主語	204例
他動詞の主語	0例
他動詞の目的語	99例
「二」句：後置詞句	10例
(合計313例) ¹⁴	

上述の結果によると、従来日本語において「NCQ型」構文の数量詞表現は自動詞の主語と他動詞の目的語に起こりやすいという主張が正しいことが検証された¹⁵。日本語の「NCQ型」構文に

ついて大木（1987）の考察に負うことが大きい、紙幅の関係で省略する。ここで注目したいのは、日本語の「NCQ型」に対応する中国語において「NVQ型」構文が現れる場合である。中川・杉村（1975）が指摘するように、日中両言語の数量表現の違いは数量詞と名詞の語順にあり、中国語では語順が固定している「数量詞＋名詞」であるのに対し、日本語のほうが自由だと思われる。但し、実際のデータではごく少数しか現れないものの、下記のようにいくつかの中国語の「NVQ型」構文が見られる。

(9) 救急車が怪我人を乗せて走り出す様子もなく、パトカーが二台もやって来たので、ずっと十二階のベランダから様子を見ていた佐藤博史は、父親の身の上が心配になってきた。
（《理由》、44）

救護車並沒有要載走傷者的樣子，警車來了兩輛，一直站在十二樓陽台往下看
的佐藤博史有點擔心父親的情況。

（9）の原文から見れば、「二台」の後に強調を表すとりたて助詞「も」がついているため、中国語の訳文には

¹⁴ 日本語の「NCQ型」構文とそれに対応する中国語の表現は合わせて626例となっている。

¹⁵ このことに関して、主な研究として大木（1987）、羽鳥（2002）が挙げられる。

本来一般の「数量詞＋名詞」（つまり「兩輛警車」；以下「QN型」と呼ぶ）という典型的な語順より、数量詞を強調する影響を受けた「名詞＋動詞＋数量詞」（つまり、「警車來了兩輛」；以下、「NVQ型」と称する）が用いられる。「来る」という動詞を取る中国語の先行詞と分離できる数量詞句が生起しうる位置について、山口（2005）は次のような例を挙げている。

- (10) a. (有) 三位學者從北京來了。（3人の学者が北京から来た）¹⁶
 b. 學者從北京來了三位。（学者が北京から3人来た）
 c. *學者三位從北京來了。（学者が3人北京から来た）という解釈は無理
 d. *學者從北京三位來了。（学者が北京から3人来た）という解釈は無理

前述したように、中国語の先行詞と分離できる数量詞句は動詞の補部（complement）の位置にしか生起しないという制限がある。実際のデータに

よると、“來了（来た）”という表現を含む数量詞と先行詞が分離しない文では、文頭に場所あるいは時間を示す語句がないとき、人間の状態を表す文においてはその動作の主体を前に置くという傾向がある。それに対し、物事の状態を表す文においてはその動作の主体を前に置いても後ろに置いてもいいと考えられる¹⁷。このことから、（9）の訳文の下線部に対応する中国語の表現として、（11）のように示すことができる。

- (11) a. 來了兩輛警車。（パトカーが二台やって来た）
 b. (有) 兩輛警車來了。（二台のパトカーがやって来た）
 c. 警車來了兩輛。【強調あり】

中国語において（11a）と（11b）の言い方は普通であるが、（11c）では“兩輛”という数量詞に焦点を当てて強調する意味を持っていると考え

¹⁶ 山口（2005）によれば、こうした文頭の“有”が動詞であり、全体で兼語構造として用いられる考え方があがるが、彼はこういう“有”は不定主語が文頭に立つ際に付加される「不定主語マーカー」と考えている。

¹⁷ 「“來了”（来た）」について中央研究院現代漢語コーパスで検索したところ、人間を主語としている場合、動詞の前に置くが、物事を主語としている場合は動詞の後ろに置いてもいいように思われる。

a. 又有四、五個警察來了。（また4, 5人の警察が来た）
 b. 就來了一個吉普車。（ジープが一台やって来た）

る。何故なら、下記(12)では「“警車來了幾輛呢?”(パトカーが何台来た?)」のようなパトカーの台数について聞かれる場合、それに対する答えは「“(警車)來了兩輛”。(二台もやって来た)／“兩輛”。(二台も)」というもののしか考えられないからである。

(12)a. 警車來了幾輛呢?(パトカーが何台来た?)【数量を焦点とする場合】

b. (警車)來了兩輛。(二台もやって来た)／兩輛。(二台も)

*來了兩輛警車。

* (有) 兩輛警車來了。

(12)は、中国語ではまず、聞き手が文の流れの中から「パトカーが来た」ということを前提として既に了解していることから、数量詞をフォーカスする場面だと思われる。(11a)の「“來了兩輛警車”。(パトカーが二台やって来た)」は、現象文のように状況の描写を表す場合に適している。また、(11b)の「“(有) 兩輛警車來了”。(二台のパトカーがやって来た)」は、「“外頭發生什麼事了?”

(外で何かあった?)」という問いに対する答えになると思われる。そのため、(11a)と(11b)がいずれも(12)の答えに相応しくないというこ

とが分かる。要するに、数量詞だけに焦点を当てて強調する際、(11c)の回答が自然のように思われるのである。このことからわかるように、中国語「NVQ型」という数量詞構文においては、数量詞を強調する機能を果たしていると言えよう。

(13)洋服にしても、ずらりと高級な背

広が二十着も並び、ネクタイときては百本近く、それも片山がしめている一本八百円ナリの特売品ではない。(《推理》、114) 光是服飾來說, 整排的高級西裝就不只二十件, 領帶更有近百條, 而且不是片山打的那種一條八百元的特價品。

(13)は(11)と同様に、「二十着」にはその量が多いことを表すとりたて助詞「も」がついているため、数量詞を強調していることが観察される。(13)の訳文では、“就(jiù)”は副詞であり、「“就”+動詞+数量詞」という構文を通して、「話し手は数が多いと思っていることを表す」¹⁸と

¹⁸ 呂ほか(2003:212-213)によれば、こうした構造において動詞はときに省略することができるという。なお、次の例文が挙げられている。いずれもその数量を強調していることが分かる。

1. 老周就講了兩小時, 別人都沒時間談了
(周さんが2時間も話したので、ほかの

されている。ここでは“不只bùzhǐ”¹⁹は動詞と見なし、数量表現を伴って「(一定の数量や範囲を)超過する」²⁰ということの意味している。

以上のことからわかるように、中国語では先行詞と分離した数量詞が現れる場合、いずれも「NVQ型」を成している。日本語の「NCQ型」において、数量詞の後ろにその量が多いことを表すとりたて助詞「も」がついているため、それに対応する中国語の訳文では動詞の前に“就jiù” “只zhǐ”などのような程度・範囲を示す副詞が付加されており、動詞に後接する数量詞そのものをフォーカスする機能を果たしていると考えられる。また、その場合について考えれば、列挙する場合を表すことが多いのではないと思われる。このことに関して、以下のような規則

性を立てることができる。

【規則性 I】

日本語の「NCQ型」において数量詞の後ろにその量が多いことを表すとりたて助詞「も」が付いているため、それに対応する中国語の訳文では、動詞の前に“就jiù”、“只zhǐ”などのような程度・範囲を示す副詞が付加されており、動詞に後接する数量詞そのものをフォーカスする機能を果たしている。

一方、「NCQ型」に対応する中国語の「NVQ型」構文が現れる際、上述した日本語のとりたて助詞「も」の他に、「～くらい」、「～ばかり」、「ほど」、「～しかない」などの話し手の主観的な評価を表すとりたて助詞の場合も見られる。

まず、「NCQ+ぐらい／くらい」型には以下のような例がある。「ぐらい／くらい」は話し手が低レベルだと評価している数値を取り立てる場合と、既定の数を取り立てて、おおよその数を表すことを意味する場合がある。前者は(14)であり、後者は(15)のようである。(15)のような場合、中国語の表現ではいずれも「NVQ型」構文よりも「VQN型」という典型的な語順が見られる。

人は話す時間がなくなってしまった)

2. 去的人不少, 我们班就(去了)七, 八个
(行った人は多い。私たちのクラスだけで7~8人も行った)
3. 一天就(跑)两趟车站, 够累的 (1日に2回も駅まで往復したから、とても疲れた)

¹⁹これは簡体字の“不止buzhi”に当たる。簡体字の“不只buzhi”と同じく発音されるが、意味的にも文法的にも異なっている。繁体字の“不只buzhi”は動詞であるが、簡体字の“不只buzhi”は接続詞と見なされる。

²⁰ 呂ほか(前掲)、p. 46-47。

(14) はいると、事務所は、狭く、机が五つぐらい並んでいた。すぐ足下には荷物がごたごたと置いてある。壁には劇団の出しものを刷った派手なポスターがいろいろ貼ってあった。(《砂上》、341)

…走了進去，裡頭很小，只有五張辦公桌，地板上堆滿各種雜物，牆上貼著印有劇團劇目的精美海報。

(15) 「そう。銀座にはバアが三千軒ぐらいあるということだけど、どの店のどういうホステスは月々どのぐらいの売上げをするか目ぼしいところはみんなリストにつくっててらしいわ。…」(《黒上》、71)

「是啊。銀座大概有三千家酒店，每家酒店的陪酒小姐每個月賺多少營業額、哪個小姐最紅，他們都有名單。…」

興味深いことは、下記(16)のような、低レベルであることを強調する場合²¹に「～くらいは」が用いられる際、それに対応する中国語では本来の典型的な語順「VQN/QNV型」ではなく、「NVQ型」が使用されていることからわかるように、中国語の表現では数量を強調する場合にしか「NVQ型」が現れ

ないということである。

(16) 波子の「サンホセ」くらいの店をもつには、それが銀座だと使用坪数四十坪の契約金だけで五千万円以上だろうし、内部改装などの設備費が五千万円ぐらいはかかる。(《黒下》、108)

要開間波子的「聖荷西」那樣的酒店，如果在銀座，光是使用坪數四十坪的場所，簽約金就超過五千萬圓，而且內部裝潢等費用也得花上五千萬圓。

(16)の中国語訳文では、「動詞＋“上shàng”＋数量詞」は「一定の数に達したことを表す」²²ものであり、「五千万円」という金額は必要の最小限の設備費だと予測されていることを意味している。よって、以下のように示すことができる。

²¹ このことについては、庵ほか(2001:370)、寺村(1991、1993)などを参照されたい。

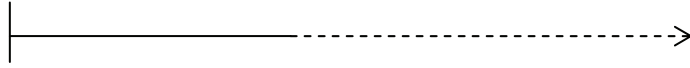
²² 呂ほか(前掲:337)による。

<設備費がかかるということに関して>

低レベル

当然かかる

かからなくてもいい



五千万円

六千万円、七千万円、八千万円、一億…

つまり、五千万円以上の設備費がかかるか否かは特に問題にはしていないが、「五千万円」は当然最も可能性が高いと思われる場合、その話し手の気持ちを表現し強調するためにとりたて助詞「～くらいは」が用いられる。このことに関して、次のような規則性を立てることができる。

【規則性Ⅱ】

日本語で低レベルであることを強調する「～くらいは」が用いられる場合、対応する中国語の表現では典型的な語順「VQN/QNV型」ではなく、「NVQ型」構文が生じる。その際、中国語の「NVQ型」構文が数量詞を強調する機能を果たしている。

次に、同じく概数表現を表すものには「～ばかり」²³「～ほど」の用法が

ある。「NCQ+ばかり」型の場合、対応する中国語の表現では、数量詞を強調する機能を持っている「NVQ型」または典型的な語順「VQN型」が用いられる例が見られる。(17)で見たように、中国語の「NVQ型」構文が使われる際、文脈によれば「シート」というものは聞き手にとって既に了解していることであるから、先行詞の“下擺的地方(裾のところ)”よりも数量詞“五十公分(五〇センチ)”のほうが強調されるため、中国語の訳文では先行詞が省略されても可能となることから説明できる。一方(19)(20)では、「スタンド (“座位”)」 「俳句 (“俳句”)」という先行詞は文脈から判断しても聞き手にとって未知のこと(新情報)であるため、(18b)(19b)のように、省くわけにはいかない。よって、(17)のように、先行詞は聞き手にとって既知のこと(旧情報)であり、数量詞だけを取り立てて強調する場合にのみ、中国語では「NVQ型」が用いられる。逆に、(18)(19)のよう

²³ 庵ほか(2000:394)の説明によれば、「～ばかり」は数値が小さいという表現効果を持つため、大きい数値の概数表現には適さないという。

に、先行詞が聞き手にとって新情報と見なされる際、中国語の表現では典型的な語順が使われている。

(17)が、もうそんなことを言っではいられない。思い切って シート をめくろうとしたが、堅く留めつけられていて、裾のところを五〇センチ ばかり 持ち上げるのが精一杯だ。これも保安のためなのだろう。(《R》、17)

然而，現在已經沒空想這些了。他下定決心翻開塑膠布，不過整塊布被固定得相當牢固，(下擺的地方) 頂多 只能往上拉 五十公分。這也是業者的保全措施吧。

【NVQ型】

(18)そういうスペースを取っても、四人掛けのテーブルが五組、カウンター前の スタンドが十個 ばかり ならんでいて想像したより広がった。(《黒上》、48-49)

a. 扣掉這些空間，室內尚有五張四人座的桌子、櫃檯前有 十個座位，比他想像得還要寬廣。

b. *扣掉這些空間，室內尚有五張四人座的桌子、櫃檯前有 十個，比他想像得還要寬廣。

(19)「そうだ、あのとき、今西さんの 俳句を三つ ばかり 聞かせてもらい

ましたな。あれからどうです？」
(《砂上》、158)

a. 「對了，我記得那時候您寫了 三首俳句，後來又寫了嗎？」

b. ?? 「對了，我記得那時候您寫了 三首，後來又寫了嗎？」

さらに、上述のことについては、「NCQ+ほど」型でも同様に言える。「NCQ+ほど」に対応する中国語では「NVQ型」や典型的な語順「VQN型」のいずれかが用いられる。(20)は前者の場合で、(21)は後者の場合である。(20)で見たように、先行詞「経験」の直前に「その」が付いているため、聞き手にとっても既に了解していることであるから、旧情報と見なすことができる。これに対して、(21)では「が」をとることによって主語を成していることを表し、「警視庁の人間でない人」というのが新情報と見なされる。つまり、(20)のように、先行詞が聞き手にとって既知の事実(=旧情報)を表すため、数量詞だけを取り立てて強調する場合にのみ、中国語では「NVQ型」が用いられる。反対に、(21)のように、先行詞が聞き手にとって未知のこと(=新情報)の場合、中国語の表現では典型的な語順が用いられるのである。

(20)今西は、これまでホシの立ちまわ

り先と思われる地方の張込みに出張したことがある。そんな時の気苦労は並みたいではない。今西もその経験を二度ほどしている。(《砂上》、56)

今西曾有過前往滋事地點圍捕犯人的經驗,那種辛苦是言語無法形容的。行動上稍有疏漏,犯人便趁機脫逃,這樣的經驗已經不只一次了。

【NVQ型】

(21) 警視庁の人間でない人が二人ほど混じっていたが、これは防犯協会の人たちらしかった。(《砂上》、333)

有兩名不是警視廳的人,好像是犯罪防治協會的人員。

【典型的語順】

また、「NCQ+しかない²⁴」型には中国語の「NVQ型」構文が用いられるものとそうでないものがある。(22)

(23) のように、いずれも「NCQ+しかない」型であるが、それに対応する中国語の表現では、前者は中国語の数量詞が先行詞と分離した「NVQ型」が使われるのに対し、後者は普通の語順となる。その違いには、(22) の格助詞は主題を表す「ハ」で、(23) のは主語を示す「ガ」だということになる。

(22) 警務と警備の部長は警察庁人事だから、県警生え抜きの人間が座れる部長ポストは三つしかない。

(《陰》、19)

警務與警備的部長,由警察廳來安排人事,所以,縣警出身的人,可以坐的部長位置,只有三個。

【NVQ型】

(23) 駅前には店が三軒しかなく、視界の先には、寒風に砂埃を巻き上げる焦げ茶色の畑がどこまでも広がっていた。(《半》、188)

車站前面只有三家店,視線所及盡是被冷風吹得塵土飛揚的焦褐田地。

【典型的語順】

(22) では、「ハ」は主題を表すことからわかるように、「部長ポスト」について「三つしかない」ということが解説と見なされる。そのことを(24) のように示すことができる。つまり、この場合の「部長ポスト」は「その部長ポスト」や「例の部長ポスト」のように聞き手にもその指示対象がわかるものに限られるため²⁵、主題を成している部分は「旧情報」を表し、「ハ」の後ろは「新情報(←解説)」を示している。一方、(25) で見るよ

²⁴ 「数量詞+しかない」はその量が少ないことを表す。

²⁵ 庵ほか(2001)、p. 316-317を参照されたい。

うに、「ガ」は中立叙述²⁶を表すもので 報と見なすことができる。
あるため、その際、主語も述部も新情

(24) ... 県警生え抜き人間が座れる部長ポストは 三つしかない。(= (22))

修飾 ↑	<解説> 新情報
<主題> 旧情報	

(25) 駅前には店が 三軒しかなく、視界の先には、…。(= (23))

<主語> 新情報	<述部> 新情報
-------------	-------------

つまり、(24)の「旧情報＋新情報」の関係に対応する中国語の表現では、典型的な語順ではなく「NVQ型」構文が用いられるのに対し、(25)の「新情報＋新情報」の関係において、中国語では典型的な語順の「VQN型」となる。このことからわかるように、日本語「NCQ型」構文においては、同じとりたて助詞の「～しかない」が使われても、「は」や「が」の使用によってその文の情報量が変わり、そして、先行詞は「旧情報」、数量詞は「新情

報」と見なされる場合にしか、中国語の「NVQ型」構文が現れない。

【規則性Ⅲ】

日本語「NCQ型」において、それに対応する中国語の「NVQ型」構文が現れる場合、先行詞が聞き手にとって既知の事実（旧情報）を表しており、とりたて助詞「ばかり」「ほど」「しかない」を使うことによって、数量詞そのものだけを取り立てて、より明確にフォーカスし強調する働きをしていると観察できる。

上述のとりたて助詞の他に、日本語「NCQ型」に対応する中国語「NVQ型」構文が現れる際、「～近く」「～以上」などのように、程度・数量の範囲を示す概数表現を伴っているものも見られる。

²⁶ 庵ほか（前掲：319-320）には、「が」が中立叙述になるのは、①「あっ、バスが来た。」のように何かを発見してそのまま述べる場合、②「昨夜中央自動車道でトラック3台の玉突き事故があった。」のように出来事を報告する場合、③「このボタンを押すと、お湯が出ます。」のように一般的法則的な帰結を述べる場合などが挙げられている。

(26)そこには保存の良い本が三万冊
近くあった。哲学、宗教、歴史から文学、美術、考古学、民俗学など図書館のようであった。本道楽の白川が買いこんだものである。
 (《短編》、33)

那裡保存良好的書籍將近三萬本、
 從哲學、宗教、歷史到文學、美術、考古學、民俗學等等，簡直像座圖書館，全都是
 以藏書為樂的白川買回來的。

このことに関して、次のような規則性を立てることができる。

【規則性Ⅳ】

日本語の「NCQ型」構文において、先行詞が聞き手にとって未知のこと（新情報）を表すものであっても、程度・数量の範囲を示す概数表現を伴うことにより、対応する中国語の「NVQ型」構文が現れる場合もあり得る。つまり、その際、程度・数量の範囲を示す概数表現は数量詞を強調する役割を演じて

いることから、中国語「NVQ型」構文が生じる。

一方、【規則性Ⅲ】で述べたように、日本語「NCQ型」において、それに対応する中国語の「NVQ型」構文が現れる場合、先行詞が聞き手にとって既知の事実（旧情報）を表しており、とりたて助詞「ばかり」「ほど」「しかない」を使うことによって、数量詞そのものだけを取り立てて、より明確にフォーカスし強調する働きをしていると考えられる。しかし、ここではとりたて助詞が使われなくても、下記（27）のような例において同様なことが言える。つまり日本語「NCQ型」において、主題を表す「ハ」によって先行詞は聞き手にとって既知の事実（旧情報）を表し、数量詞は聞き手にとって未知のこと（新情報）を表していると思える場合、中国語「NVQ型」が現れやすいということである。

(27)「小学校は 二つあるけど、どっちのこつですか」(《短編》、218)

<主題> 旧情報	<解説> 新情報
-------------	-------------

「小學有兩所，您是問哪一所？」

【NVQ型】

したがって、上述のことから次のような規則性を立てることができる。

【規則性 V】

日本語「NCQ型」においては、主題を表す「ハ」によって先行詞は聞き手にとって既知の事実（旧情報）を表し、数量詞は聞き手にとって未知のこと（新情報）を表していると思なされる場合、中国語の「NVQ型」構文が生じる。

また、前節で述べたように、“把bǎ”による目的語名詞句の分離について、(28)のような例が見られる。但し、一般的に言えば、分離した数量詞の基底形は「QノNC（数量詞＋の＋名詞＋格助詞）型」となるはずであるが、(28)を見ると「ありったけの財産を二つ」²⁷は「二つのありったけの財産を」という解釈はできないため、例外と見なすべきだと考える。

(28) …家のありったけの財産を二つに
わけて、その一つを、びんぼうな
家の子にやりました。（《ふるさと》、314）

…就把家中所有的財産分成两份，
一份送給窮小孩。

さて、“把bǎ”による先行詞と分離できる数量詞の構文はどのような場合

で用いられているかについて調べたところ、次のような例が見られた。基本的に(29)は(28)と異なる数量詞が使われていても、意味的に類似しているため²⁸、(28)と同様に例外と見なし、「QノNC型」に置き換えることができない。

(29) 盧氏夫婦知道實情之後，向薛湘靈
鄭重地拜謝，並堅持把所有的家產
分給 她一半。

（前略）…

- a. *全ての財産を半分彼女に分けた。
- b. 全ての財産の半분을彼女に分けた。
- c. 全ての財産から半분을彼女にあげた。
- d. 全ての財産を半分に分けて彼女にあげた。

(30) 老太婆，拜託，把魚罐頭開它一個，
熱個湯吧。坐。不急，丘子章也想喝一杯。

（前略）…魚の缶詰を一個開けて…

（以上、「中央研究院現代漢語コーパス」、日訳は筆者）

²⁷ つまり、(35)の「二つ」という数量詞は、ここではその財産の数が二つあるということを表すものではないため、性格的に言えば「二分の一」という意味をしていることから、例外と見なすことができる。

²⁸ 日本語の訳文について母語話者にインフォーマントとなってもらった。(36a)は非文であるが、(36b) (36c) (36d)のいずれかの日本語訳が可能だと思われる。

(30) では、“它ta” はただ語氣的な表現であり、特に意味がないため、省略しても差し支えないように思われる。(30) のような“把bǎ” 構文において、中川・杉村 (1975) が指摘するように、例えば「我把三隻猪都賣了」(＜三匹しかいない＞豚を三匹売った) という日本語訳になることから、“把bǎ” の目的語が「定」でなければならないため、先行詞を限定する働きを果たしており、数量詞を新しい

情報として強調しているのではないかと考えられる。

4.まとめ

上述の【規則性Ⅰ】～【規則性Ⅴ】をまとめると、日本語「NCQ型」に対応する中国語の表現では「NVQ型」構文が生じる場合と典型的語順になる場合について、次のように図示することができる。

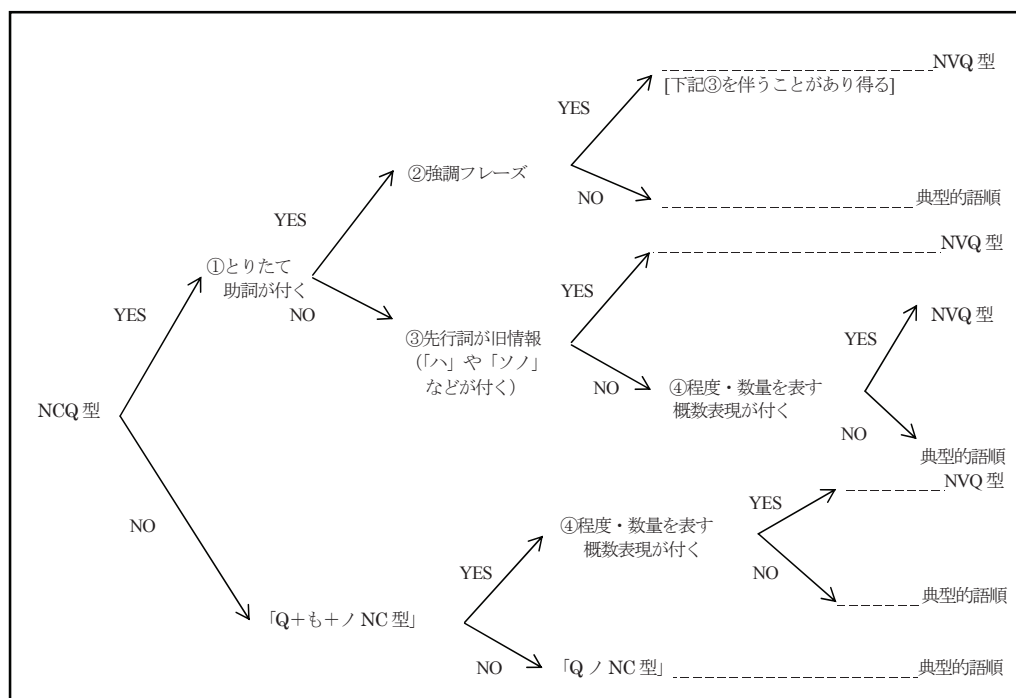


図1 日本語「NCQ型」に対応する中国語の「NVQ型」と典型的語順の使い分け²⁹

²⁹ 日本語の「NCQ型」以外の場合は、洪 (2007) のデータベースに基づいた考察結果である。

図1からわかるように、中国語の「NVQ型」構文は日本語の「NCQ型」、及びごく数少ない場合は「Q+も+ノNC型」にのみ生起する。さらに、談話機能の観点から見れば、中国語の「NVQ型」構文が生じる決め手となる要因として、①とりたて助詞が付くこと、②数量詞を強調するフレーズが付く（たとえば、「くらいは」など）こと、③先行詞が旧情報であること、④程度・数量の範囲を示す概数表現が付くこと（たとえば、「近く」「以上」など）が挙げられる。但し、注目すべきは、とりたて助詞が付かない際には、単に先行詞が旧情報を表す場合や程度・数量の範囲を示す概数表現が付く場合に中国語の「NVQ型」構文の生起が少ない。しかし、とりたて助詞が付く際には、数量詞を強調するフレーズ、または先行詞が旧情報を表す場合と共に使われると、中国語の「NVQ型」構文の使用が遥かに増えることが観察される。このことから、とりたて助詞が付くことは中国語の「NVQ型」構文が生起する現象にとって第一条件であり、他の要因は第一条件と関連する二次的条件と考えられよう。

本稿は2008年9月に東北大学に提出した博士論文の研究成果の一部をもとに加筆しまとめたものである。

参考文献

- 庵 功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 2000 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク——— 2001 『上中級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
- 大木 充 1987 「日本語の遊離数量詞の談話機能について」『視聴覚外国語教育研究』10 p. 37-67 大阪外国語大学
- 奥津敬一郎 1986 「日中対照数量表現」『日本語学』5 p. 70-78 明治書院
- 加藤重広 1997 「日本語の連体数量詞と遊離数量詞の分析」『富山大学人文学部紀要』26 p. 31-64
- 洪 雅琪 2007 「数量詞の連体修飾における日中両語の対照研究—「数量詞+名詞」」『国際文化研究』13 p. 143-156 東北大学国際文化学会
- 沈 家煊 1995 「“有界”與“無界”」『中國語文』第5期 p. 367-380
- 高見健一 1998 「日本語の数量詞遊離について—機能論的分析【上・中・下】」『言語』27-1~3 大修館書店
- 寺村秀夫 1991 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版——— 1993 『寺村秀夫論文集Ⅱ』 くろしお出版
- 中川正之・杉村博文 1975 「日中両

国語における数量表現」『日本語と中国語の対照研究』1

- 羽鳥百合子 2002 「日本語の数量詞遊離：用例にみる機能的特性」『川村学園女子大学研究紀要』p. 13-32
- 山口直人 2005 「中国語の遊離数量詞」『日中言語対照研究論集』7 p. 114-131 白帝社——— 2006 「“有界”と“無界”と非対格性の仮説—2つの異なる“V着”存在文をめぐる—」『日中言語対照研究論集』第8号 p. 77-89 白帝社
- 矢澤真人 1985 「連用修飾成分の位置に出現する数量詞について」『学習院女子短期大学紀要』23 p. 96-112
- 李 瑞芳 2006 「談話における数量詞表現」『日中言語対照研究論集』8 p. 165-177 白帝社
- 林 璋 2002 「中国語の数量詞とアスペクト」『日中言語対照研究論集』4 p. 91-105 白帝社
- 呂 叔湘編 2003 牛島徳次・菱沼透監訳 『中国語文法用例辞典（現代漢語八百詞増訂本）』
- Miyagawa, Shigeru. (1989) “Structure and Case Marking in Japanese.” Syntax and Semantics 22. New York: Academic Press.